

武江年表

二

和書門類			
二五二五	號	函	架
一七	冊	架	冊

內閣文庫			
二五二五	號	函	架
一七	冊	架	冊

內閣文庫	
番號	和 25255
冊數	8 (2)
函號	141 87



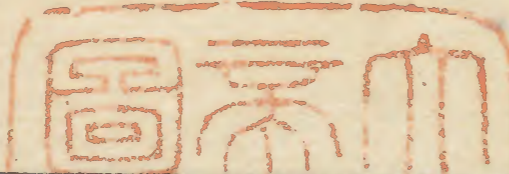
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





武江年表卷之二

寛永十一年 丁丑 三月 閏

三月 天海傍心志願ふより切經一子巻を刊行せしめぬ上院

○八月 秋元南率儀茶屋おきふらんを以て華以祖おん録りく

の祖おん父なり ○七月 八日 星月を曇く ○十月 肥前あまの島まに耶麻やま

宗むねの老おきな権けん紀き以も翌年二月 謀あは成なりあり

○江戸中なかつ風ふう呂ろ屋や女め之の人ひと階かりり小こ命いのち一ひとあり

同十又年 戊寅

夏より 寛永十二二月 以も不ふ差さるるままて遠とほをの男おとこ女め伴ばん勢せい宗むね席せき

指さしささるる事こと疑ぎ一ひとあり

武江年表卷之二

○東光山為福寺社田舎より浅草水堀へ移す

○十一月赤川小島松山東海寺浄刹立東山辰菴和尚

○今年以来豊國の貢を抽す一ありと云

寛永十六年 己卯 十一月國

駿府浄城書院書院番へ命せしむ

○高田為方より宗刻東山貞翁和尚廣宗あり一
ふ子親世書をあつくりうり

同十七年 庚辰

二月日光山廿五圓浄神志了却修行有○二月より八月末まで

天下牛多く死に○世頃何果彦小文つらせし淨丹方系中

りつる事少く年十六男名カの意地ありて今年二月同席細射り宿と

り其意を切害しは是の同月その日と云り命せしめ浄宗考す事

り於て自らをぬくは時方系と男名の繁りあり一同席赤川

系女うなめの心つらき事十八も多し来りて俱ともに自害トゴく矢々々を世に

世のうらみとありけること左系傳
世の号

また其時月もたなまわれてありて一りも其のまじりあり

系女傳世の号

も後にもけりし事ありてありてのいとまじりてえん事その山川

に頼業を志しつる藤原物語りつる宗法一冊其の書より法をえり

此其の詳ありしに為窟の編の男名大鑑ありし書を載しり梅の系傳
ちげし事

隆業の極名の藤原ありし事ありて居るが如くありし事ありて今

の此の始末を承りし事ありて承りし事ありて承りし事ありて承りし事あり

○六月長宗公耶蘇宗の族黒船一艘を長崎に漂着のりの

六十余人を救せしむ○九月六日山内山内

夕暮を情こしきまふ本ののりよりあききしきつ海城の月 辰巻

寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜桶町より火火望海日焼くけり鎮守町敷九十七町武家
と百二十町新屋敷を以て火の大火と云ふ

○池田系圖之百七十年巻成然 林道春先生主解儒士也
丸山の傍に修撰ありしと云

○東叡山五大師院へ巡行執事成る 上野五條天神社へ瀧天神

を合祭す ○柏木村田原寺某師堂某日局法再建

○二宮村を齋通町と号し 元禄六年又改
て十川町といふ

○福さる ○青松より貝塚より忠宅中へ移さる

○七月 兵部ありて陸奥守を主子権現縁記撰述あり終る將時

主馬の著あり ○秋葉敷梅子新不熟 ○八月朔日大風船十艘の石

船取川沖ふ沈む 後浪人この西を根と号し一浪瀬川寺ありといひ一浪おき若十一年
八月宿作豆田根府川より大石を獲りしと云

○八月仲田留東賞寺子に生さるる像を立 奥邊代徳寺及也
宝海上人とあり

○北へ移りて中汗 三浦岸
ん他

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日辰末を焼亡 は池田村系圖
といふの古巻

○二月十九日辰末を焼亡 を脚く撰述するの古巻もは沈むといふ
あふいそは他しは火の門ありの火あり

○二月より七月より天下大飢饉米價貴確一死人多し一は救米

續をぬる ○八月諸候参勤交代始る

○夏服中伝尋以法下向あり八月朔旬法降洛の日漫居所一宗要と

あり ○二十二年間堂始る 其三人形由都町
り所法後八天海傍

○二十二年間堂始る 正江年表古の巻所地二十二年を造管ありしと云
志取小竹信正の撰書あり

ありしを基地を今の所より下りぬ

○寛永の以ては神田佐柄本町雑子町の隣り丹後寺殿に在り
ありし丹後殿前と云ふを畧して丹前と云ふ地は風呂屋敷と云ふ
ある湯女もありてこゝに遊ひたり人木のさぬを尋舞妓小亭ひて

丹前風といひしは洪書より元々さへ不畧一川
丹前の川は丹波の川に合流す
の末正保の川下谷

○寛永九年梓河の江戸給界ありひびや町
江戸の市中に記しありし
戸田屋の市中に記しありし

より先神田町と皆海邊なり後永新地を築き置きあり今の
後池の所より江戸の町とあり
おとせせり長
併とらん合はる

吉原町八廓内は江戸町すみ町系町新町けん蔵町とあり
寛永二年の
築き置けり

思案橋は今の荒布橋と因今えり
今小細町にあり思案橋は
昔の志案橋の所よりあり

浅草御門内は喰町思案院武家家のこけりて町屋あり
ちんちん
唯今も地蔵院

知世港
の側小
舟の
たの
非田の
あり

多んどん坊天岳院をあげし所は法あり
本せん大せうせんせん知見院あり
おとせうち法せん

あり同所向より南八丁橋まで疎小を院あり
大橋と云ふ
ふ動院といれり

上りつてや法十日ありせん大正あん法を法と云院あり
親者せん久大をうすのころにせんせんせんせん
のんと海うんとせんせんせんせんせんせんせんせん

法あんトあり○今の深正橋向八丁あり小田田深正橋あり
くろ
町名今と違つたあり

六十乃河原 大橋町裏
今川を
今川を

ふき屋町 今令
吹町
今令

新小田系町 三河下の橋之有や
今令
今令

後後摺

今異振摺あり寛文
との圖おもき記せり

二ごくどぬ

今の石川
あり

以上寺院の号町名文字詳ありされい系本不極りて後字のまふ記に

○江戸繪圖梓抄す本ハ寛永永小始りしあや其より以後のり世ふ

傳りて世時代の圖ら南の世摺す世之目を踏りぬる内堀端新町の

入に沼池を踏りぬる小川町新田川濱茶搦を踏りぬる大川を踏り

て載る本の方城按善悪源右の圖
いふこ同寛文及びより江戸不度くもあより

○世上通用の書籍の記取一筆書と較しゆと書く事ははより

始りし目々えり女子の一筆と書かひ事ハ古れり又ふらぬくこと

ありとあん東海濱翁系
まふ小カえり

○本村誦十帝言致る續武が國後云按第六寛永の末ふはあて

お來はらるる六枝竹といふものを引ふ是と書く世のには田長門す

始り製は葛藤も稀ふしまき番の決しお具を本條袋ふ入是を
番袋とせりぬりしを世とせり云々

○薩摩小車古

泉夜堀の書
或記夜夜と云

江戸より中橋小舟子採芝居を興行せ

薩山先け向陽漢耕の二子を誘引くかんおせり云々いふは

○事上誦合考小浮獨瑠

後後短人形也一書悪く寛永元年以後迄く京大板よりりり

一の之といり

○花浮踊りひんご節あより所搦あどりつ小唄行る

長壽寺所伝と
りつ小唄もこの

時代より貴族勢を畜ひ椿花を弄ぶ事行る

あがぬめりつ小寛永の頃の
本ありおをりつ併ふりる

つんをたをといひせせる親世をまひ今春うらうら
さんといふの羽打をまきうけて用ふる云々記せり

○中島浮雲といふの江戸あて求紀胎を創り始む

○春甚獨治も寛永の頃風俗男を草のうらうけ草の袴を

其後より女の紫草の足紐をたく成能たけをひとせり婦女乃
 帯の合襟あひだを女の襟の詰り玉地小梅様柄を布く小織付おこは是を
 鉢の赤紐あかぢと名付て結きけるくさ度さくさはぐう小線尺の二寸斗の
 紙をひくく線ぢちど入る事あり一月より八月まで婦女の礼装
 并線ぢちく度さ線尺の八寸より一丈を結不結ひてたるを付帯
 とり今今のもも帯の首の帯より一丈中畧男女の衣後首ら
 極く質素あり男子も女子も十に女まで六丈尺社をさるる小
 むの線尺は七八寸を極りさせに貞享の比より式尺計より
 ありまよりかりかくなふん長くありて近きは二尺に四寸り
 ありぬと見えも婦女の帯も貞享元禄の比よりも漸く度くあり
 て今の線尺は八九寸および小綿をあらうま襦あはのぐうあはとこの

肩うで衣きぬのひの首ら麻の幅線尺の八寸計あり中貞享元
 禄の比より幅き尺および寛永の比より婦女細おこ麻繩あはを髪かみを
 結むすひてふとを巻き結むすむる巻まくは後麻繩あはを止とめ紙かみを中
 の紐ぢちの紐ぢちより粉紙こなをて元結紙もとむすのひのを造りかして結むす
い月の婦女皆是を測はかり丈たちり結むすめ巻ま事ことも止とぬ中畧江戸の婦
 女亦また出でるおむむししきまままとて巻まき結むすめう面めんを包かく目ざり
 あらうける其後線ぢちを面めんを結むすみ一尺たち二十あまり宝永
 の比よりき今からちいさな線ぢちを改かえいつきつつのこめく面めんをひ
 らあささつつとまままやう成都とを送おくを中畧男おの面めんをあらをひき
 りの線ぢちは編あ蓋がの肩かたの上うへとうるをううる時々は女めの
 ちとくか帽子ぼうしをううりて面めんをくくひひありたの中尺たち小後あ面めんのちとく

日が釈宗を肴んとあふは江戸本銀きて往久間某の婢女たけを舟
 以てしし雲雲の告を世あり彼家よりして舟女を渡せし後舟
 女の念仏三昧ゆゑ大涅槃をそごりしとて後往久間の親を
 尋ねて大日如来の像を造らしめ湯殿山黄金寺を納む
 べきを世におもひ大日如来と云 往久間の墓八幡寺塔中にも先院あり一燈
 有相なる所の一燈あり後某の孫徳三（引）は
 彼家の水盃の今も先院
 下におありありや

○寛永の江池森といふ和借町小落を
 ぞんじん（僧）ありて寺遠ひよとろさのよとろせり今ゆへくついで
 氣遠のたつとままり此池森と云々をく踏らるるも其取ふべ
 人の笑ひをくき〇一む後萬福の女入謝を佛とて江戸大池を
 瀬廻すもさぬおちりろくまて彼池森さぬ不似たりとい
 池森を佛ともよびけり〇世に流すたり

正保元年 甲申

十二月十六日改元

正月廿二日所彫物所若忌を若々重継 七十 増上寺小涅槃を彫
 ○寛永年津鉄砲所向于沼百は方の代を指及佃村の漁人あり
 〇今午年二月漁家を建並入本寺の夕を以て佃島と号し奉國
 の産土邦信者明非を奉祀以

○上野小慈眼大師重源 法時小慈眼大師
 の隆号あり ○青山法皇院軍劍

○二月町人の長刀を初名は和紗の合羽名は停止あり又作勢大官
 布衣を穿ててるふある事を傳ゆふ

○五月十九日琉球人東歸 正使合来王
 武政王子 ○徳朝光治元年あり明を以て

一統以〇本控町六丁目忌村長三澤若く居始三代同より後山村

長官支府と改む 正徳に年あり其居形始

○十月十八日右京家基人彦月甚重死六十今も深川雲光院九
 下菓あり○十二月廿六日明人吳宗親率二本棧上行き不菓あり
 明親の乱を避て来り一人あり○二十三日重光り人ら昨後後より
 根居之吉廣へ交代に久高ハ寛初申を建てるものなり
 藤原久高と号し今不未續せり

正保二年乙酉 五月間

二月十五日丹赤くして丹の如し○二月廿二日田文坊を丹國宗道
 世して空仁と号しけり廿一才ふと率後世の世世の如く不菓あり
 東之山中親成院あり

○多敷親田明神淡茶より山登へ移るし而不あり一を誠山
 深光院の時の如き誠山

○江戸より始り尾を焼くと高氏某申氏意なり
 ぬに戸尾原の先祖と号す

○十二月十一日東海寺澤庵和尚寂世宗廿二才之流類不遺偈を遺す
 昨世を去りて其の室をまゝして寂す

同三年丙戌

十月漢去兵乱未止明の解野平戸つ官鄭其意と云
 本邦へ援兵を請ふ

○冬平田麻松と宗判尾山正徳宗判
 宗判素素心危なり

○金工平田氏祖道に率て長中朝鮮へ入り七宝流一の法を傳へ人々

○大島居氏於社を軍府神廟と改申給ふを將事於あり飛戸村

し宮居再真氏

同四年丁亥

二月六日小塔遠く度率友京政一齋の号宗甫今年六十才之は宗親旅山登菴小
 藤原古田徹の門人茶道同利の人和舟に於泉岩の如く

○四月十五日夜月の暈に方月影の如く曉の月に見えりあふた
 渡河重甲賀町之

○四月廿日官医醫道院園奉書治法下率廣尾祥雲寺
 千葉氏

○五月十三日江戸大地表上於大佛の像碑破けり○七月廿二日水陸本
 林堂

○九月十五日刀劍同利本居庄左馬助終織田家不仕一人あり

○十一月十二日 台命ふより王子村に於て松平藩刀部大進物

真行あり も物いなき西に十三万石山に十万石平塚藩林の田あり
一とつり林を赤た道あり一毛編輯あり

○十一月箕輪某王より後向名地流る速 正法春海法下造と云ふ首領あり
海乃不て乃流不度一不あり云

世年間記事

正保中日向公秀清山の瀬沼を藩刃より大坂へ送せ大坂より京

下ゆき辰屋内安土山鱈角と名付一りの大肉止めぬひ面何 おむきむ

三唐松の三種ハ水唐二年の以武江下をまより橋立へて流

忍ふかてり ○大橋を常盤橋と改められハ正保の始にあり力あ

○十河ひさひとて歌をぬく事ある十河辰といふ武家の人ハ既

はきとりのいひかゝる事とせ又此時代流る意氣歌を好む東海乃

名所記ふうハ祭を世世の声不揺りよつて云ことつりハ松虫の声

とハマンとをぬきせつるを以ハ詞ありとて

○世事終むを以時代京室町候の久吉仙流の油を賣始むと後

二傳市仲字交濃子の平嵐是を創製といふゆめての女このうゑん

脊中喜たぬと始とつり 東尾唐のゆゑ家ハ寛文仲室町まで丁目一唐虎
中村よりま仙流見世をぬきさかき後門一唐時

白水といつる女形仙見世をぬきこれ油店の元祖ありとありつりまら先ある未詳

寛文正保の以長崎より唐本の商人和泉屋本之助といふもの

江戸をもちり池の惣不流一始て古書籍の賣買をよと後大書肆

也と流り是古本賣買のまらわとせ

○或は家の不流ハ正保年中江戸國の官本あり方城を廣一市川

浪若南若指本頼司治致込ふりあり大川を流りて市仲の景

寛永の國小治り一島中津ありて後所を越彦は鷹の磯小下赤
が居あり日本境の約ふとららん塚ありありの岸に浦坂の辺に浦
を築く助成は鷹の磯の東向小門あり門外ありて後所は正
町中りあり

慶安元年戊子 正月四 二月十五日改元

慶安中改元ありしを

改年の法慶安徳の天下也 平井卜養

○春荒蘭山小亮朝院七面半室基あり 寛永十一年今の如く
言出くうりたり

○谷中地命院七面半室 長山日羽上人の居あり七面あり日あり
系路一室中不備一板を蔵し一室社を創ると云

○四月十一日天海傍に慈眼大師と号するをあり 慶安中系編法元八幡の元
あり

○日光山二十二回所忘所法念法華八幡あり あり

○五月男をむらひし御免荒犯事林を林せしむ時何某

麻衣といふ英お年の事小付強動ふ及ひし昔く拘りし

りり男色の事此ときより止寛文の頃より又行きてしり

ありて止るより同書より 昔の方云ふ男色を言ふた虎堂時道と云ふた
虎たふ六巻虎の及脱たふ虎席の及と云端後

○九月右田嶋稻荷社建立 若林兼次と
云人寄附に

○江戸中風呂屋の遊女法創林あり

同二年 己世

日暮里諏訪明神社造営 是と六終の系
初ありしと云 ○大塚善門山大慈寺遷葬

○二月十日持神より尚後年 是十七年一本慶安
三年正月七日云 ○麻疹流行也

○六月廿日武蔵大蛇患江戸中武蔵町志津に死人恒多 上野
大蛇

○五月十二日河越大蛇除 寛永二十二年小
半ぬんち蛇死

○八月廿日江戸大地震 ○九月琉球人來聘 正徳天皇
川王子之 日光山へ参詣

武安二年 庚寅 十月 國

二月山王権現社 市城内より荒町へ移る 一説は寛永七年より移るとも
以後万治二年今の所移せり

○男女侍勢字届へ参詣止る事行る 今云ふは
参りあり

○二月廿二日夜江戸大地震あり ○二月十三日狭容情随院長を掃

死 寺僧人にも給ふはつとも終くともと云ふありは横
墓へ今も浅き深きあり并拜殿の年回を吊り ○五月團く波あり

○六月二日法園毛滝 長は
又寸 ○六月二日より浅き親高寺に普請始

○琉球人來聘 ○仲井絨起 ○八月七日後父郡より大風あり氷渡 大井
公九

女より
十女位

同日 辛卯

東叡山 市宮市造營 二月城控及堂あり是れ造る
一を市再建あり一とりの

○二月十二日狩野山雪率 六十二
院是也 ○秋深川八幡宮ありて狩野屋の法

或をうへへ流編り真行始る ○中村幼之助其居所稱宣町今根町

らる ○十一月廿九日井の堂敷除伐せらる

○十二月廿七日管中威意より長上入寂

此年間記事

酒蔵といふ事行る 慶安のより大塚の地黃坊持次池上の大塚丸

蔵源をいふ名せり 大酒の業堂を括ひて酒を呑み事あり

之を類案を記しし水記といふ冊子あり は去寛文三年小下りせり
池上氏正徳後移の事あり

齊海考小川元より又川流移る所田原慶より孫る辰
孫らるる孫せり七合入の事あり中不詳く孫の孫給あり

○寛永永の業業意の以て今根本智といふ事波河町本智所乃

外ふは、海人の商人つねもあつて金子つち二分つて銀或はかくの銀子
 ありて、幾片し替へて、時々は、台を、淡路の果より、日本橋の浦水
 の町へ、来りて、とて、この事あり、是は、室町、長通り、町、浦水に、所りる
 片、銀、賣として、數百人、各々、買ひ、つて、府、おけ、居て、か、き、銀、を、替
 を、替へ、つて、の、り、つ、つ、ある、事、之、青物、町、お、替、を、一、軒、見、世、を、か、
 て、徳、藏、を、変へ、つ、つ、九、十、六、つ、本、取、の、銀、を、積、貯、も、合、子、を、分、か、
 り、目、は、お、も、替、せ、つ、た、物、も、自、ち、お、も、見、世、出、つ、つ、と、つ、江、中、
 お、の、店、へ、来、り、つ、つ、お、替、し、つ、つ、是、を、見、て、江、中、お、替、ら、つ、お、替、屋、の
 見、世、お、つ、つ、と、つ、
以上、事、係、合、考、お、替、の、事、お、
 之、事、お、つ、つ、今、つ、お、替、町、の、事、
 かん、ち、あ、つ、つ、

○この時代、毎年七月、盆、市、お、つ、つ、れ、つ、布、巾、の、男、女、踊、り、を、催、し、つ、つ、
 賑、つ、つ、○津、沼、瑞、瑞、齋、庵、お、つ、つ、山、丹、後、極、虎、齋、源、お、つ、つ、市、と、お、

あが、お、後、を、清、を、お、つ、つ、お、替、ら、つ、つ、お、替、ら、つ、つ、お、替、ら、つ、つ、

兼寛元年壬辰 九月十八日改元

正月廿日の御眞足、海、島、奉、つ、つ、十一日、不、満、つ、つ、十日、曉、雪、降、つ、つ、

羅山文集

餅、資、座、上、甲、兜、蓋 時、有、寒、花、發、孟、阪 鐵、額、銅、頭、賣、銀、否
 雪、如、白、馬、祭、虫、尤

○呂川寺水月觀世音の事を修造し海照山呂川とつ、
は、つ、つ、
 弘、法、大、師

○六月、危、舟、舞、妓、市、制、禁、お、つ、つ、
お、替、を、利、つ、つ、お、替、の、帽、子、を、つ、つ、
 水、小、崎、作、市、お、替、お、つ、つ、の、銀、お、替、

○八月廿八日夜、江、大、風、雨

同二年 癸巳 六月間

今年玉川の上水を都下小通して虎度の用不充ぬる

○玉川上水のをくぬの方甲及丹波山の幽谷不獲せ同玉丹波村を

るにて或は多摩郡なる甲及一の隙より多摩浦村と七里餘まで

羽村まで十三里までありたると十六里計ありて羽田浦より海不令に

九里半 兼寛元年の春玉川を築つ兼清を患とせりとの形にて羽村

よりいざまへの水道を考へ同十月上旬上水は割の縁を命せしむ

おれの翌己未初夏より仲夏より羽村より江谷太本を延堀後一

虎石門まで玉川の水を掘きしとせし後徳方武が方市中

小分水して日用とす嘉徳門外玉川管轄地との玉川

○神田上水を園きし事ハ多治能ありて武徳編年集成不夫保

東天に井ル 命命を文て水道を考へしより多摩川の水道を

小石川より引ぬるをせんしりて小別神田上水のなるへ一沾涼を流

す六江戸整易すつき世此のよりよりすて六石足ある友兼寛不あり

玉川を助ぬるもあられとせり神古神田上水再修のと記

兼寛家より述る事とて松尾忠方一説は七石ともあり築りりの

善法寺行ふじんぶぎやうとてしり兼寛寺人後あはは備丈とありと云又堰とあり

をてく旧址をせりく旧址を世々世々不修なるをて按る小石川の寛文十二年九月始

て東武小川のといひ又兼寛とてり一年とて延宝二年ありと

さるすし扇の俗辨とてしりせきなるあり一説は二年の海之出は善法の

事ゆきしありと

神田上水の井の取の池多摩郡 年礼村に同郷藤子の池日

多摩川の水道の流流井村の末ふあり命て神田上水の

助ありとある今その地を蔵合村といふおくらい 年終村より蔵合と
 十二村を經るる田村より目白庵の中まで二つふるま一流の流
 ありて大洗堰より江戸川より蔵合一流よりありて小日向をより
 あり府橋津波の中を流すすく年終村より蔵合のり
 極ありて流るるをあきりと号し其の流津波の極極を修ひ
 小川町を經く津田よりあり津田よりあり又一筋の津田橋
 あり蔵合橋より幸銀町本町辺あり蔵合橋よりあり本村本町を
 支國の辺渡町等よりあり町敷九二百七十丁程ありふ
 あり上あり通せざる蔵合と赤坂溜池のありを引け解折くのあり溜池
 池のありてこより引て用ありとありて六強より自はありてふ
 然とありのありて万民過り汲んで快樂の思ひをなす事誠あり

津懸橋修きてり於ありのありとありをむ

○正月二日分は津門の内青山某る婢女菊といわりのありて秘苑
 の血を破りて害せりとて靈魂出するをありて事人の不給矣は
 ありとも事実を信せりといふは附合の然ありて

○九月琉球人來聘 正使女 改王子 ○金剛工右忠氏祖重次率 八十二才

○此年秋易行院小使客助ありと譽と稱するものあり西入澤ん信士
 義貞二年巳二月十一日と稱し例ふ女の法名あり を以て享和元年中鳥事
 馬つらふあり

義貞二年 甲午

後系古親世吉岡根 は附賽張を合二百五の入れ小原ト賽張
 せりと云はれ平考の番花ふもあま

○今年町奴津穿數あり 屋の市に去陽廣大橋を架かといつて男舟運と号せり
 西堂のありあり六右組ありと号して市中をこのこい

唯晩を仕うけ諸人の防せしもの云々組云々家木のり碑世前う奇一考柳多菊
の用持兼亦を見て之を説をあらへしこの男浮世の内山申源左ふとりのの心浦幸申
後町まは法ちや後切し時辞世

〇十一月十八日將時休伯長伝卒 七十八才

〇市村羽方忠つら芝居あて跡を始む政を粗云々六女醫者を

せしづり芝居の悪名を汚名と云々

〇十一月十八日將時休伯長伝卒 七十八才

〇市村羽方忠つら芝居あて跡を始む政を粗云々六女醫者を
せしづり芝居の悪名を汚名と云々

〇十一月十八日將時休伯長伝卒 七十八才

此年間記事

兼寛中芝生町より品川まで浦宿ひろ為駕石櫃を命せり
此間年記

〇廿〇日物産小云芸安の願夏屋を造りし而船を造るあり

〇廿〇日物産小云芸安の願夏屋を造りし而船を造るあり

屋根船を掃へある後品川を舟口してとむ足船遊山の始りあり

翌年大舟航もあり船造り多く大勢ある故不涼しうく又翌年

大船が来は出るもあり兼寛の以船造り之あつる小舟唐のる年二月

江戸中の大火事後三年船造り止む方治の以又く涼し船造りか

徳人等を凌ぐ船造り多く歳万艘と云七八月の在船船あり後船の

名をつけ川一九宮東九大宮丸山一九熊一九十男一九あぐ名付る

舟あつてく英をくく一済籍奉十人あま六餘十年之歳の際く

掛けあつて是を武士の志とする云々
中右別涼着月の船大うく二段を佳積と
せる故清介あぐ舟小他より平井ト養

〇十一月十八日將時休伯長伝卒 七十八才

〇市村羽方忠つら芝居あて跡を始む政を粗云々六女醫者を

せしづり芝居の悪名を汚名と云々

魁を見せ給ひ是女達七女已後他人不まき一は女子計付並若あ
 けは後面をうらふ之風唐の以迄の志人わう獲えうりきをきとてありき
 一は一方治のほり江戸中止む大火のり後あめんのよふ玉おと
 り小葉をうむり正徳中虎もむぶちと云編草を中り是以寛文乃
 以小松坂より小葉定室の以不熊谷並おもそうありまあり八分あり
 是を中り又天和の以貞享の以より編草止る世居並あめん一は
 上下世小葉並不取らふ○大身は格別小身の人の侍虎上下とも
 上より又と獲計忌して獲を死て歩けさる人もあり又八梅の
 二尺、日掛を録芝扱一ける人もあり申間を一寸ありふも増
 一はありと云、昔くありふは時世の風俗報事らハ
 ○福毛成中九子村羽長持親六天正中の幼法ありと云一葉更の以更及今世のせま

小舟二葉とり大舟のより一は風を船ひ是あてり歩けさる人もあり又八梅の
 舟非人と成この取あ来り一は因社をわけてふ思儀の呉語を以成るる齒立地中
 以歩自をともありて因社あまはして唐を誦又唐人一非符あしあふられ
 江戸葉を在の法人系消群葉は多岐一より一は唐二年江戸大火の後自
 一はありと云○葉更二年刊行の江戸圖不替親と云今小柳町の取あり
 淺草法門内了喰町の辺小雲光院弥勒寺所念の及人よりあん
 徳寺法安をせん一ト親教寺日輪寺知恩院寺り新田川の今云
 新しと橋をさる人ト人橋新田橋を大炊取橋と記り日本橋西の
 一より南橋町迄の町屋の内後後源左衛門
 庵おひこせいフン音琳派治橋おふうのあらん通一丁目あり
 本より同二丁目東側一より町裏見えせ二十高りつも町裏
 合春七高りありと云水を八号町又作川町の水も八号町有山五
 法後所今の辺あり海城橋辺より南ハテ橋をさる院
 宣永のあふり



叔字ありしう増く一移りてそ跡大抵武家跡あり

明暦元年乙未 四月十二日改元

梅前より集小年号改元の因果

明暦や梅のあはれひらり

といふあり改元は日ありり

○中宮正徳寺宗刺開山良重和尚 和尚の實文元年十月日寂八十 歿翌より大同室禮國師と謚号をある

○玉川上人今年おかり金銀就せ中津田同言ふ

○市谷永安寺月桂寺とありしを○六月廿五日於本寺の卒 称九 左支

号する人後系 法後寺并葬 ○九月朝鮮人來聘 正徳翠原越新副使秋漳輪陽後事 有竜翼旅宿寺持ち之韓人日光山海海を

○十一月十二日医師板板ト卒 名如春後系寺中一医至院不葬を林行也權 是一碑不修後院ありト板八後系砂利地

の辺小文庫を建和後海の書籍を収め 法人不端むこれを後系文庫とす 同 以後系流傍町の如妻不塔田加洲彦

の法下中現ありは内小大ある土を造りて内小和後の子叔芳也を

行へらり世不後系文庫と稱しりり

同二年 丙申 四月

正月廿二日夜赤雲ありあり○正月廿九日びせのり自己の存あり
ては家の老いおびせりり若かすまゝたると合せり

○後系山門の仁まこの以後を造りて世不云ふり一其後群

存あり○六月赤雲ありありの年のおく小二年あり

○六月に日より親世をまゝ勅進能身行 非田橋本 田彦の妻 ○後系お終て新後

存あり○十月九日吉系町をり 石上寺代地とて寺方は言

碑の地を日本境の辺 千束の内 田北あり あてりりり引料とて合せりり

小石刻十 ありあり 十月十六日夜長後町よりお火水風

強く中橋南振治町松町辺敷焼

○十二月十六日茶入令森雲乃及彦率 名長通号宗和

明曆三年 丁酉

正月九日谷竹町火事 日暮坂町火事 九日吉祥寺邊中町
 火事 ○正月十八日乾大風来刻より幸に五丁町裏幸妙寺より火
 陽津津田邊津第津門内町通町筋藩倉河津京橋八丁地
 屋敷屋敷後池海子佃島深川子より翌十九日己刻より石川河海院
 常務寺通町より焼中一牛込出町田安出町津田橋出町常務橋出町
 吳後橋出町八代河津大島津後野寺尾橋出町等焼亡又同日吉
 町 麹町六丁 目つき となり火出て幸尾出町の舟橋田鬼出町等家下橋上町門
 前札の辻海子まで焼亡此後焼死以上のはる家及び百餘宇は旗本
 七百七十餘宇組一組毎家数を考へ以て皇社之音平船宇町屋

二百町所町八百町焼死人十百七十五に千六人といひ倍て幸尾下

二町は方の地をぬひ非人をして死骸を船まで運べば塚に集て

七の院を建てておまら山無縁寺回向院と名のありありあり 去年十月の
為幸正月の

あかきと受あかき一廿日ふとて大君隠承價一財 正月廿二日より七日のる火災は

けを掃して旗民の困苦志し一た路に悲運に 正月廿二日より七日のる火災は

おきて肌僅おありお常へ所し一お終て粥をぬきり又町中へ銀子

を寄す 金中して十六万あるに二万お
を卜しぬきり
因縁の罪人を火中の附放
する事この時より始まる

視書重集 江戸田祿の後飯お小座をあらうひまか人をむを刀を

とくおといひありおむむはのらおの 小座
昆陽 世の中の家を冷しは吉川惟足

正月下旬吉原町小座掛を令せし 事跡合考ふこの時一旦吉原の内今の跡物
ちの雨より荒地中一五橋中一

六月今の地へ引りつり新吉原町と号し八月より商賣をせしむ

明暦三年正月尾板の江戸捨居の内えきるは江戸三丁すこ町糸町新町の名ありて
揚屋町の名あり一邑いえきる二丁江戸の地を今の地とて別揚屋といふ代地をのり
一尾すこ町の向ありありこふ町をひきききり一邑町の中より三町ありあり
揚屋を二つふありあり揚屋町とあつけり一邑地の辺りありあり揚屋町
町新波町ありあり揚屋の名目あり
ふよりめくこふ町ありありと云く
○正月廿二日羅山先中率
七十五才横巻おきそ乃
列業おきとて元禄十一
の災候事也
○大火の後江戸中町家瓦葺を掃せしむ
山伏町下福屋

此年間記事

東本願寺非田明林の下加賀屋敷と唱つる地のあるあり一と西暦
中津若今の地へ移りし
人火の跡
一と東本願寺と唱つる地と日本
紀後彦の由井た元房町の西た田徳布彦の由を委あり
皆武家屋敷とありあり一あり西本願寺横山町の辺りあり
○武家屋敷といふ者紙ふ
明暦の大火の
事とせしむ
とあり柳系と町を二軒のけられきりて人ふりて東西十町

ありし土を築せし日本橋の南町とりに江戸市迄の町屋を
たりのあるありに江戸橋よりそふ心よりけ東町新町とあり
とあり又日本橋より日本橋まで八町のあり小町屋を九のけり
今所よりありありありありありありありありありありありあり
とあり入込中もまたありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありありありありありあり

○大火の被害多く日本橋通江下北の側細き道を五輪町といふ所より
不せき
築るを他の上居するありあり

○災後茅協町あり一葺高妻のありありありありありありありありあり
始の江戸所より一移りしとありて本所茅協町といふ

○世時武家の属邸後時多一又寺院も不替あましく有吉祥なる
あるは橋より約はく橋また橋北を吉祥と稱するは因に表すの事ありありあり
寛文をうり元福はとの江戸も亦吉祥と稱する事あり

○靈山より江守寺法祥よりいさも湯崎よりいさも大仏後浅草へう川ふ

瑞林より昌平橋より谷中へ橋を敷き八丁橋より浅草へ橋隨之

院日輪寺今の毎芝
橋の西へ 世願寺今の小
橋東 非田より浅草へ聖徳寺天藏院あり

○幕府門内より浅草へ今地へ橋を

○世時代今の如き交會を南へりの文より一水唐突後金杉山乃

門より始て菜飯豆腐汁黄湯大豆をこくにしてをわきまると名

はけいかせしを江戸中場より金杉山のあるや喰ひよゆん

とて縁の糸橋より一丸の糸真しとあり

○浅草見附橋を石橋五兵衛屋利を造りしは新橋より始り

猪牙松を製して山音通ひの案をこくふ事あり又所よりいさきこり

ありて通ひしもゆりしあり奇海考も此の系紙不妻し
その日のい
ゆりしはゆりしとありこれくそなき事あり

○菜畑より小畑菜畑あり還綴紙料よりいはいわ
菜畑をうりつもの山へうりけい
あり

○水唐に奉山崎寄赤の遠遊紀行を鈴ヶ森より始り

つるありこまを將けしを鈴ヶ森のわしを以て人倫をこあり兼意

のひまもありしありん○単曲柳川檢校八橋檢校行る八橋は寛文
の末の終焉
あり

○水唐二年の江戸園大坂町今大橋町二丁目
うり橋あり 阿比の町今小舟町
二丁目あり

あり非田堀橋町の淺井寺築ちまあり

○万治元年 戊戌 十二月間 七月廿二日改元

正月元日夜市谷安養寺と二世秀登の妻小舟衣の老翁形を

和舟を縁し白紙とありてあるとありて信託社を建ちり

とて異流著しと江戸妙子より

○正月十日幸々々行むとて引續江中大半焼亡東洋

○二月本換町海子赤坂小日向等築地あり牛山殿内と築土の向之小日向築地の向この山を

引田を地所を中村劫三郎 二月十五日時時素川依政率五十二名

○六月九日様若き順先中村劫三郎 夏二田の地小舎は度別

築の地をある地北の邊に廻り老朽小徑一帯の跡なり別廻塚と

稱もあつて松樹を植て遺蹟を標せり寛文二年夏弘文院城

○程公降邊氏寛永中花子の程より名を考へて後述世々

道沖と号し楊梅鏡泉寺鏡々比の辺に徑一口の鐘を鑄く

は然も奉堂再建の程を記し又池の中より舟才天の少羽を

建より今年七月廿七日七千餘方本と記せり洞房後室

○八月江戸中盤結株一町小妻を承り八百八株小室の梅り小江戸町

程八百八町といふ事此時代の事也寛永のありぬぐりあり 今六百六十町除町小

及より○今年日本楊梅善法始る○九月十三日唐僧隱元禪師

持良善門より江戸小妻より一町湯河原祥院小七十餘日迄

あり貴族群集也この時數 六十五と云 ○溪川海福寺宗刹尾山強

○同淨土寺宗刹尾山日 義上人 ○日暮里經王寺宗刹元禄師

○喜山崎園齋翁江戸小遊秋為多し遠遊此河あり

○今戸村百姓九高者男九高助相中のもよま一編為社を

若くは後以是を九高助相所といふ○九月明の軍降國姓爺

鄭成切率邦へ援軍を請ふ名ハ芝船又森宿といふ今年三十九才

○東海乃名不記成茂井より作 寛文中板切

万治二年 己亥

正月二日とりの二月廿四日まで火災百廿夜あり法人安んじたり
ありーと我 五條裏小正月十日 ○日本橋を掛返らる 武平寺者五條の橋を返らる

は船場て句梅撥家殊とあるーとつていふありん堂元の時つまらり
の墓ももぎやうーありはと死に玉務次といふ人まう好まらり

○二月山崎雲齋翁再江戸遊八月序より再遊記あり

と解散友東遊あり ○四月廿一日永田三協山王権現社今の

地(市造堂今日内近とあり 舊地は堀端ありて是板屋の内を敷とり
乃を廻て小島とら社地狭くは其の時於地

の屋あつた板屋時の板屋と改修屋を敷 ある一丸ま ○朱澤水止金明末の札を遊

あり日本(有 衆あるはの事安後為章の年山
紀安あり碑屋のふを載て洋あり

○七月二日大風も浪あり 浪も浪も二浪をみるあり
とつてみ尺不と繁とつとつ

○九月深草元治法師母を候 伊豆の 身延山本宿ける次小江戸へ

紀江身延記といふ
身延記 万治二年亥

九月五日池上(まうてゝる小上人言中(おのふと)不徳をぬきそあて江戸へ
候きねたとくま小日本橋のりつと二階ある小小月を見て

日本橋邊 日本秋 更無一事掛心头 今宵新見江城月

影滿扶桑六十州

せききわふ並居てつまなくある後片唐のやまとのふとらんふんつとや
幾日ありありらん或は侍帳(舟よみけんをかりくもあり母は六日のあ
こよりその破ふのミ居あ(いま井の余而ふあひかからち)てうらめさ
多る附あー表附財物もとも旅宿の月といふまをまんとてあ

ふさこまてらんまあ死新も旅ころも神の思ふむさーの月

う死あうと踏ひるまあーと手控の秋をりた武彦時つと

月もまてあつとあひるをせずと国川がひきねむの藤原介

○下谷永昌ちふ下谷長者 長者町(いさ) の墓とくありと元院夜か巻

玄安居古万治二年亥九月廿九日とあり年号新くーけまハ銀ー

けきと長老の子孫おとの業あり

○神田川堀割の事仙臺庵へ命せしき今年由普法始る所年
ふりり大川より柳東通り茶のあしあり約込吉程寺舊地例
半込ふりり法和廊地堀おまへて大川へ通河と成る
以揚土を以小川
小日向小築地お

○今年より平野河川築地堀小地を築きをひらき川を舟橋
をりり武和庵を舟小地定めありり後天和二年回向院と今の
舟橋

○十二月靈巖を深川へ移りり海町とありり
以地者一田屋をせま所
舟橋をいりり社のみ
今よりあり

○十二月五日吉東二浦屋の名妓を虎死轉芸妙女伝女と云
ゆきぎ
えよこ

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

○今年より江戸町へ新築をりりありり
未詳り上せり

題 兩國橋 鷺峯先生
扛梁新建枕長流 人是陸行吾在舟 疑似猛竜横卧勢

總州為尾武為頭

○本挽町立丁目小森田を所為高始て芝居真行に後代に始と号

○五月霖雨あり○九月廿五日に基前二世大橋宗桂二本板上行と小基前宗桂の号

○むぎあざり二巻梓行後唐大火のゆゑ死せるを
此のの流下とより

此年間記事

上野小令銅二丈三尺餘の大仏の像は唐万治の以本會澤雲再建

○六月保徳を七面宮勅清○州人陳元寶波國の札を遊さ

本邦より江戸と田舎町に來山必思ふ小偶居ぐりきを以浪人

後世七赤龜の職員次高者等の二浦と次高者あふ活りける明小人を

捕りぬありあを授を日る小志ありありといふ二人は術を授

○熊を二丈を紀創流葉術の始尾及小終まり紀創流葉術後世に及も田長

○万治の以後及河津川の辺より酒樂しうらくといふ海防に及り法人の

願并紙帳の月入りしんりは八人の役を獨りひととあり一ひと代女といふ

草紙ありり八人藝のちありあり

寛文元年 辛丑 八月国 正月廿五日改元

正月十九日の夜光村ありありありありありありありありありあり

○正月廿七日齋通町より火火太直の辺に治橋系橋の辺

本挽町まで家方町を疑く焼亡○新進相模しんしん今年より毎年

續々ありあり○二月より浮勢宗廣うきせい男女を系治とる事疑

○三月十二日林漢耕稼しんかん率率二十八名を猪毛しご西三子

○正月年号改り一時

○二月年号改り一時
○三月年号改り一時
○四月年号改り一時
○五月年号改り一時
○六月年号改り一時
○七月年号改り一時
○八月年号改り一時
○九月年号改り一時
○十月年号改り一時
○十一月年号改り一時
○十二月年号改り一時

○六月今夏小春本川に新橋あり人及法番西原川に不達橋あり川
はけり後さる○秋十年末の豊作と云

○八月二日若領城宮不統く老るるを修ふ事を行はる

○十月廿八日江戸大火あり一は江戸海をわたり物も得ありは

○十一月二日浅草堀田東原藩内塩積倉より火を以て武蔵府に流
焼亡

寛文二年 壬寅

○正月廿九日江戸大火あり一は江戸海をわたり物も得ありは

○正月廿八日先祖古尊より作奉九十年古尊賞歴の家あり平次氏
あじう代く古尊を以て氏に

○三月廿二日午刻大地震○五月廿日より廿日また月暮り事終り

○九月廿二日小春こふ終り

○九月廿二日小春終り

○九月廿二日小春終り

○九月麻布つ本松小場より退隠の地あり

○江戸名所記撰行七巻海井
了意能

同 二年 癸卯

○正月廿二日午後七代顯宗終四十分

○六月十五日清宗子熊谷安方より稻荷社勧請

○羅山文集刊行 百五十五卷六十年 ○飛戸下瀧宮今の地(宮邊橋)

先ト 子孫を以て 心字の沈及橋此年八月祭礼神樂行列中の儀武家府の例に於て奉西の地を巡りて橋を廻り集りて奉安あるの如く之を成る所

○本朝編年録を本朝通鑑と改めあり

○八月十五日 飛塚海士の羅山念無和尚存血子乃其子 念佛三昧之

○今年より天和三年より川で飛戸村中橋を築

平安方度との洞佛を鑿りて築る所を信小耳白との小橋を築

寛文元年 甲辰 五月閏

○版田町法務部入小命せり

○七月七日連舟所里村去俊率九十五

○市村作之助玉川を橋あり續紀云引幕大

同五年 乙巳

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

○八月舟商人は鯉の古記を新じ

入魂一人くのか入魂といふ事後田男女の媒妁等の行状とて殊
物を交わらう武徳彦の息女銀色の事申付備をうまう下りぬ
くみをおせしういふ事承取に實文を以八月追給せしむ
其はよりして條計を以人々を甚々慮といひけりといふ

寛文六年 丙午

二月廿六日人形のおと現光おちあふと二女服
とりみ

○ふしのふせ 東叡山浄橋浄の
橋

○津村幼二節うき之居ゆくお漏をとりむお漏は長年日記本
の巻末に記す

○九月一日林梅洞二十号久敷号梅洞幼亭
後平春伝と稱す

○黄金杉海多百餘弓の地を細平場尔深原一同十戌年九月町割
ありて新網町といふ

同七年 丁未 二月間

三月府中六所宮法再建

○四月赤井大納言下向の時南田川おせうが
あま

をんたのめがたをて隅田川不潔にうけらるゝ小船人 難波中

○五月梶井宮隅田川は遊覧あり

おとらん名をりけりおまといとて都を遠き隅田川に

○七月の末若川燈籠に神道の受をりて燈籠の翁は神宮宗
海へかけ入て心通の

夜をひらめけりて夜を起せし人又舟をもちて世に賣せしる視普をまき屋の
視普を集 本所の社地浄原の後神道不ろくおひけりた
神道のねむいひをて老のまき屋のついで作所代々れ

わさあり本のををりて終るを清く世のまけりこせ

をり三首あり社地をまきりてお地獄中のなり社地といふ意比の神社あり本所
の地むく本所とてをえ願元年本所の文字ふありこや一社成出ふ元元とて

おのろく本奉のときとあるをてしる
ははより本奉とてしるをてしる

○月黒直指院揚巻窓之道人者如入定以
直指院の揚巻とて本食の
聖あり念佛の暇仏を刻

あまこころをいふ子侍の安直は同奉本奉を信ひ世味の人をいふ念仏をすむ寛文六
年二月被察念の始順年十月廿日世せせんを知らぬ法人小若く又西中い
乃ん若ありて世の中のをたを感へて祭らへし妻子を被直指の骨をありけり
所せんとて世せせんといふ今年十月十八日念をうけし日六種飛大信と成て念せの腹
痛を辨んとて剣をりて穴小入指人念佛の声とせし小土を投入て行時小懐む又揚巻
と十月廿日小若く念仏救返小路ひに十七才小若く眠るる也く世せしは信中若く
さるの友多指院集まると奉極しり
しり以上記名不記の又を畧む

寛文八年 戊申

正月廿八日乾の方より雲の方小等さどの巻き白乳立夜に消以消了

○二月初日未上刻斗込酒井家内下庭ありりか火出えん草荷町直迄
士町市谷田町小あり同日又市谷天龍寺寺内よりか火出納戸同ん
庭及び寺の庭同ん庭上上原獨揚坂武家方六番町へ火火へ五番

町二番町糺町一丁目より六丁目まで楊田辺信後山庭ありり

あつひ小辺をさるる方新橋まで海辺ありり又市菜のち上より
出火後河邊辺神田橋鎌倉河原日本橋まで焼亡之方の火の
一折小ありり武家町屋敷く焼死せり又同中又信谷行一甲

よりか火出大名庭ありり○二月二日日輪二ツありり
○同月四日辰中刻さめ橋よりか火出大名庭ありり焼死
日る庭へ火火へ二田寺町武家地有總臺寺子寺まきく焼亡

又同日中谷車坂よりか火出中谷直流士町庭徳寺まきり本
所へ火火一二の橋町焼亡○同月六日未上刻小日向藥地武
家よりりか火出直流士町身込門の内へ入此筋焼て田安内門

のちち入又柳平庭ありりか火出直流士町版田町もちの庭

坂をまて焼亡 古之日の火事本武家屋敷二子百餘軒町屋百
二拾七町傳寺院百廿九宇百姓屋敷百七軒なり

○二月吉原廊下ノ火事をひく死傷町法見町と号凡
依見丁ハ
年寄の
古候ありあり
名つけしとぞ ○二月町人帯刀せり事本林本せり

○二月幕末山下向此時

月夜も林本ありて作見見の雲を雲つらの家士を名を死
本を井
雅章公

○夏徳玉昇 ○四月より五月切先内切く
是と云は徳玉の
はつとせり 虎の山つと

幸指山つのもくお稽を掛く

○水宿より半里水坂坂村ノ土中を穿ちて合像寺の觀世
おのつと

音をほりて背子割して弘長二年二月とあり里人
きうとせり

嘗て安
あんち
ちよぶ 安
あんち
ちよぶ 教の觀世音是なり

○十一月十三日後八代而系率
三十一 ○歳事本實文八年江戸小世二書の
觀言札不始りて大洲九段小男女

歩行後あり
とせり ○昔くお稽を掛く
とせり 又のちとせり十八教子日

万日の圓向標とて人集りて事あり 實文中年小始りてあり

實文九年 己酉 十月日

二月に日流系十五堂焼亡 ○二月之日流星
まうせ 本小の喜慶の如

○奉公人が替り二月二日ありし今手とり二月六日と候

○飛戸を満家社地不法地坊を初清一社を営む

○七月旗夷人札を去り十月まで小松前彦とて平おろ

○七月十八日能人石田本得率
八十餘文流系
世移りて事 ○八月十日大北表

○大洲河系流演家發以 実後人依り亦久方馬の寺并存た馬の川

常雲泉市右馬の号なり

寛文十年 庚戌

五月十二日辰下刻より己半刻まで嵐の如く成り掛り

○八月大風 ○予翁傍於不忠并文天社の根下地を築立小堂

を建内和の書籍を収めて徳人小としまはしむ

○本朝通鑑成 二百七十二卷 撰山崎若水二先生編輯

同十一年 辛亥

予翁傍於不忠湖中築小築く不の地一輪を建す

○白金瑞雲寺の冥剣 撰山本菴匠 美築船匠之

○七月後水尾法皇の飛戸天満

○七月琉球人來 正徳合武王子 日光山系瑞雲

○八月廿九日南大風雨波あり 撰山崎若水

○十二月十二日晴天震動あり

夏は雨あり

同十二年 壬子 六月望

二月二日身込澤獨橋板敷付あり

○二月初をた非樂小若松宮以事を止らまはし大津を治せ町中勅を

以てはりの養りやがううは結の行人若中穿敷あり

○同六月晦日大橋流等道祖大橋を改修

○七月十一日狩野元後秀伝卒

此年同記事

不忠并文天の島へ石橋を渡して参詣の通流と云

○品川河原山へ橋を植せしむ

○軍学志山鹿甚五左衛門 名公素行 恨人多 寛文中津を犯し古くは津野彦

の郎小巡せし是迄室二年小なり先返さる 貞享乙丑九月廿四日其

山藤流十八郎の 本をばかす代八車を修る八人の内小代るあるは

世事津野 紳共大八といふもの川藤氏とあり一以土をまふ 事をはかす代八車とて今も利ら幸と記り

○始く元結を製 其の一本小水板六本其の一本方麻布入り板の下中元七元結 とも名物の元結を掲ぐといひ世の終り元七といふ元結

小指の下の名ありといひ教村子小文七ふまるとあるのこつかりといふ元七を 文七と云は結このひをいふ元結の名を並小製一人の名小刻ひあるへ其角の茅場町 を製する事ゆゑ ○世時代男侍連六方組等あり膳員十左衛門よとせ

舞首あり ○大の頃俳諧作未得未取加友一貞心友持子

吟市等あり ○隆建節 隆建は京の橋あり世に去りしと 名和寛永の頃あり一節とて曲

節は江戸 義兵節とて 虎座永保通江名文治森土佐松

○降より活り櫻井丹波松 和歌山 合平が

薩摩外紀長門松石見松 紀前松生あり 降より小唄の事ハ予が 声曲新纂ナリといひ

○春繪残魚釣の事江戸不知る人あり 寛文中上総

の船政立大の仁兵衛といふ名流海小松より釣始るといふ漁人

そとあつ 安永三年 中卒

○大の頃狭客の額を披上る事行き あり 浪客の宗因

あり 一財源見十左衛門の額を具て一八日月や東より月より此

額を披 是廣く披上るものあり唐大びひの唐大橋を披る

額つき のりあり但一橋を披る兼意のありありか

十津小水橋といふ 此は江戸の男を披る

○寛文十一年より十二年近輝行せる遠近 江戸國府 五枚丹

此の妙塔約近難司官あり青山浪客あり 踊りあり日本橋

南二月経歴加多博板とあり

鄭和を加つ事
正徳五年



武江年表卷之二 畢

